

櫻間瑛著 『現代ロシアにおける民族の再生 ポスト・ソ連社会としてのタタルスタン共和国における「クリャシェン」のエスニシティと宗教=文化活動』(書評)

著者	伊賀上 菜穂
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	61
号	2
ページ	70-73
発行年	2020-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00051779

櫻間瑛著

『現代ロシアにおける民族の再生——ポスト・ソ連社会としてのタタールスタン共和国における「クリャシェン」のエスニシティと宗教＝文化活動——』

三元社 2018年 379ページ

い が う え な ほ
伊 賀 上 菜 穂

I 本書の概要

本書は、ロシア連邦のなかの民族共和国、タタールスタンを中心に居住するクリャシェンという集団を対象に、彼らの民族運動やエスニシティ（民族意識）について、おもに文化人類学の方法論に拠りながら分析したものである。

今日、クリャシェンの間では、自らを「独自の民族」であると主張する活動がみられる。しかし彼らは1920年代の一時期を除き、国家によって「民族」だと公認されたことはない。一般的にクリャシェンはテュルク系のタタール民族、そのなかでもカザン・タタールの中の下位区分集団とみなされてきた。彼らは帝政期の正教化政策によって「ロシア正教を受容したタタール及びタタール化した周辺民族の子孫」（25ページ）と考えられ、しばしば「受洗タタール」と呼ばれてきた。20世紀初頭に実施された人口調査ではその数は10万人程度であったが、実際は30万人以上とする見解もある。

著者は、クリャシェンはなぜ「民族」を名乗るのかという問題について、彼らの民族的、宗教的な自己認識を歴史的な背景や社会的・政治的な状況と関連づけることで、「この集団が『民族化』する過程とそのメカニズムを明らかにする」（3ページ）ことを目指している。本書のデータの多くは、著者が2008年から2015年までの間に実施した現地調査に基づいている。

本書は「序章」と「結論」の他に、全4部10章から構成されている。序章「ポスト社会主義時代の民

族、宗教の展開とタタール、クリャシェン」では、文化人類学の民族・エスニシティ論を参照しつつ、ソ連・ロシアにおける民族とエスニシティ、宗教をめぐる政治的状況とそれへの学術的アプローチが検討されたうえで、調査対象となるタタールとクリャシェン、およびその調査内容が説明される。

第I部「タタールの中のクリャシェン」（第1～2章）では、「クリャシェンとはいかなる集団か」という問いについて、タタールとクリャシェンの歴史的関係とその現状をまとめることで答えている。第1章「受洗タタールからクリャシェン、そしてタタールへ」では、16世紀から始まるロシアの沿ヴォルガ中流域支配のなかで、受洗タタールないしクリャシェンと呼ばれる集団が生まれてくる過程が、ロシア正教の宣教活動との関係で解説される。そしてロシア革命後、民族自決を掲げるソ連においてクリャシェンも一時期「独立した民族」（73ページ）として認められたこと、しかしその後はタタールへの融合路線が採られたことが述べられる。

第2章「『ジョレイハ』とクリャシェン」では、クリャシェンに対する現代のタタールの視線を顕著に示すものとして、2004年にタタールスタンで制作された『ジョレイハ』という映画が分析される。この映画の主人公である受洗タタールたちは、書類上は正教徒だが実際はムスリムとして暮らしていた人々である。だが、映画のなかではこうした強制的受洗者とクリャシェンを同一視する演出が多くあり、クリャシェンをムスリムではない「誤ったタタール」（105ページ）とする見方を補強しているという。

第II部「『クリャシェン』という運動」（第3～5章）では、クリャシェンをタタールとは異なる民族であると主張する運動がとりあげられる。

第3章「クリャシェン運動の勃興」では、ソ連末期から活性化したタタールの民族復興運動のなかでイスラームがタタール文化の不可欠の部分として意識されるようになり、もともとタタールの民族復興運動と足並みをそろえて展開されていたクリャシェン文化復興運動が、「独立した民族という主張も強いられることとな」（146ページ）る状況が記述される。

第4章「クリャシェン運動の公認と分裂」では、2007年以降のタタールスタン共和国の多民族共存路線のなかでクリャシェン運動が公認され、その活動

が大規模化していったこと、しかし共和国の方針に妥協する機会も増大したことから運動が分裂していった様子が描かれる。第5章「国勢調査とその論点」では、「民族」認定をめぐるクリャシェン運動の主要アリーナとなった国勢調査の問題が論じられる。ソ連解体後のロシアで初めて実施された2002年の全露国勢調査では、「自己意識」尊重の原則のもと、民族認定をめぐる各地で激しい論争が展開された。そのなかでタタールとクリャシェンの間で重要な論点となったのが、ソ連の民族概念を引き継いだ「起源」と「宗教」、そして独自の「民族文化」であったという。

第Ⅲ部「クリャシェンと宗教」（第6～8章）と第Ⅳ部「クリャシェン文化を求めて」（第9～10章）では、上述の重要論点のうち、宗教（ロシア正教）と民族文化がとりあげられ、政治的な活動としての民族運動と教会、そして人々の日常レベルでのエスニシティとのずれが明らかにされる。第6章「クリャシェンの宗教復興と日常」では、ソ連時代のクリャシェンの信仰実践と、彼らの現代の宗教意識のあり方が示される。第7章「エスニック・シンボルとしての教会」では、ロシア正教の公式の施設としての教会とその活動、一般の人々の教会観と実際の関わり方がとりあげられる。第8章「儀礼の位置」では、クリャシェンの村落部儀礼コルマンに向けられる聖職者と民族運動家の視線の違いが分析される。ロシア正教会の司祭らは、この儀礼に含まれる正教とは異なる土着の要素を「正しさ」からの逸脱だと否定的にとらえるが、民族文化復興運動ではまさにその土着性が、民族文化として重視されているという。

こうした世俗性を重視するクリャシェンの文化運動を観察するのが、第Ⅳ部である。第9章「『クリャシェン文化』の現在」では、ソ連的な民族文化の展示の在り方に倣う形で展開されている、タタルスタンおよびクリャシェン地域での学校、博物館、アンサンブルの実態が紹介される。第10章「『クリャシェン文化』のハイライト」では、クリャシェンの文化を広くアピールするために行われているピトラウという祭りの変容が論じられる。かつてピトラウは地域ごとに異なる形で祝われていたが、共和国から支援を受けるようになってからは一部の村で大規模化し、ソヴィエト新儀礼として発展したタタールの祭りサバントゥイと似たものに変化した。それを

懸念する活動家たちによるクリャシェン文化の展示にも、ソ連時代に様式化された要素がみられるという。

「結論」では、クリャシェンという集団が民族を名乗る過程、およびそこで宗教に付与された意味が検討される。

Ⅱ 民族共和国と宗教と「マトリョーシカ・ナシヨナリズム」

本書の副題からもわかるように、著者はクリャシェンのエスニシティを分析するにあたって民族共和国というロシアの政治システムに注目している。タタルスタンというロシア最大の民族共和国の内情に、基幹民族であるタタールだけではなくその下位区分集団とされるクリャシェンの立場からも迫ったことで、「マトリョーシカ・ナシヨナリズム」(10ページ)とも称されるロシアの複合的な民族関係を描き出すことに成功している。また分析対象に現代だけではなく帝政末期からソ連時代を含めたことで、この地域における民族をめぐる政治的・文化的システムの繋がりと断絶を示すことができた。

著者が文化人類学的方法論に沿って、村落や個人に密着したミクロなレベルでの長期間の観察を実施してきたことも高く評価できる。個人的にはソ連解体後の全露国勢調査の状況を、2002年と2010年の2回にわたって詳細に記述してくれたことがありがたい。今年、2020年の秋に実施予定の3回目の国勢調査とあわせて比較することで、中央集権化を進めたプーチン・メドヴェージェフ政権20年の変化を総括することができるだろう。

ところで本書では、これまでおもに宗教によってのみ近接集団と区別されてきた集団が、自らを後者とは別の民族だと主張するようになる契機は何か、という問いがたてられていた。「結論」部でまとめられたその答えは、明解である。

著者は、帝政末期からソ連初期にかけてのクリャシェンは、ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』[2007]で示したナシヨナリズム論をなぞるようにして「民族」の地位を獲得したと述べ、言語と出版物、人口調査が果たした役割の大きさを指摘する。すなわち19世紀中葉に、母語による教育と布教のシステムの創設者として知られるN.イリミンスキーによって、クリャシェンの日常語=俗語で

の聖典の翻訳・出版が行われたことで、「クリャシェンというエスニシティの形成」が促進され、「さらに、それを一時的にせよ公認することになったのが、ソ連最初の国勢調査＝人口統計であった」(330ページ)。その後彼らの民族意識は、同じく言語と人口調査という方法を介してタタールのそれへと誘導されていくのだが、ソ連解体後にムスリム意識を強化していくタタールのなかでクリャシェンが周縁化され疎外されたことで「ハイパー・サイクル」(331ページ)が起動し、「政治的アイデンティティ」(332ページ)としての民族という範疇の名乗り結びついていった。そのため、彼らの間では宗教が「民族アイデンティティの指標」(334ページ)と認識される傾向は顕在化しているが、それがかならずしも実際の礼拝などの宗教実践に繋がっているわけではないという。

この結論は昨今のナショナリズム論、エスニシティ論のなかでは同意が得られやすいものと思われるが、今後考察を発展させていくためには、旧ソ連地域を中心とした他地域、他集団のエスニシティ論と比較することで、この結論がどのように位置づけられるかを検証していく必要があるだろう。つまり、民族の名乗りへの「ハイパー・サイクル」を起動させる／させない集団間の比較、ある集団によって選択される政治的アイデンティティの相違を分析することで、タタルスタンあるいは沿ヴォルガ中流域の特殊性ないし普遍性を明らかにすることができると思う。

Ⅲ ロシア人、正教徒、正教会との関係

本書のもととなった著者の博士学位申請論文のタイトルは「『クリャシェン』とは何か」というものであったが、本書はこの問いに対して起源論としては十分に答えていない。これは、タタールとクリャシェンの錯綜した関係性を記述しようとした著者の覚悟であると理解するべきだろう。つまりクリャシェンの起源を述べるということは、クリャシェンを帝政ロシアの強制的宣教活動の結果であるとみるタタール史家の言説か、あるいはクリャシェンにタタールとは異なる祖先をみようとするクリャシェン運動家の言説、あるいはそのどちらでもない第3の言説を受け入れるという結果にしかならないからで

ある。

それでもなお本書がクリャシェンの歴史を、著名人を除いてほぼ、彼らとタタールとの間だけの閉じられた関係性として記述しているのは気にかかる。とくにタタルスタン共和国の人口の約40パーセント(2010年)、帝政ロシアのカザン県の人口の約38パーセント(1897年)を占めていたロシア人(民族)に関する言及が少ないことは、評者がロシア人研究に従事していることもあり、残念であった。

正確を期すれば、著者は調査地となった3地域の村を紹介するなかで、それぞれの地域にロシア人が住むことに触れているし、「1990年代初頭には、ムスリムのタタールとクリャシェンを比べた場合、後者の方がロシア人などと結婚する割合が1.5倍多かった」(202ページ)という研究も紹介している。だが帝政期に関しては、18世紀中葉の正教化政策の傾向として、正教会が「改宗者とロシア人の間の婚姻を推進しつつ、非改宗者との分断を図り、教会の建設も進め」(47ページ)たと述べるのみで、その実態には迫っていない。さらに問題なのは、映画『ジョレイハ』のなかのいくつかのシーンである。著者がこの映画を批判的に扱っているにもかかわらず、主人公のタタール女性がロシア人男性と強制的に再婚させられる場面が、あたかも唯一の真実のように読者の記憶に残る。これには、印象に残りやすいフィクションを第2章という早い段階で紹介したという、構成上の問題もあるだろう。

一般にムスリム・タタールのもとでは初期の支配者層の改宗を除き、正教への改宗が進まなかったといわれている[濱本2011]。もしかすると帝政時代のクリャシェンの婚姻関係は、本書から受ける印象のとおり、集団内部で閉じる傾向があったのかもしれない。しかしロシアの歴史では、受洗異族人とロシア人との結婚、およびその結果としての両者の血統的・文化的混淆がしばしば報告されてきた[伊賀上2018; Sunderland 1996]。帝政ロシアの正教化政策の最前線であった沿ヴォルガ中流域で正教を受容した人々の相互関係を知ることは、当時の民族関係を考察するうえで重要だと考える。著者には将来歴史学の立場からこの問題への解答を提示してほしいと思う。

もうひとつ、ロシア人との関係について述べれば、ロシア正教会とクリャシェンとの関係にもう少し踏

み込んでほしかった。これに対しては、すでに阪本秀昭氏が自らの書評のなかでまとめているが〔阪本2019〕、このうち評者がとくに重要だと思うのは、ロシア正教会組織とクリヤシェン教会との関係である。クリヤシェン語でも奉神礼を行うカザン市のティフヴァイン教会は、現在はタタルスタン府主教管区のカザン主教管区に属しているが、当然そこには聖職者同士の関係も存在する。クリヤシェン語を強調する教会の在り方や、クリヤシェンに対する指導方針で、府主教や主教、司祭たち間で意見の齟齬はないのだろうか。同様に、さらに上のモスクワ総主教庁は、非ロシア系教会についていかなる方針をもっているのだろうか。教会組織内の諸関係に注目することで、ロシア正教会がもつ多民族国家観が炙り出されてくることを期待したい。

IV 「少数民族」とはだれか

最後に、著者が用いる「少数民族」という言葉をとりあげたい。本書では著者がクリヤシェンのように公的な認識に収まりにくい集団を記述するにあたって、表現に細心の注意を払っていることが感じられるのだが、それでもいくつか気になる表現があった。そのひとつが、ロシア連邦だけで500万人を超える人口をもつタタールを「ロシアの中で最大の少数民族」(181ページ)と呼ぶことである。この場合の「少数民族」とは、非ロシア人という意味であろう。こうした見方は日本では一般的なのかもしれないが、ロシアを研究している者ならば、ロシア人が他民族を「少数民族」あるいは「民族的少数者」と呼ぶとき、しばしば侮蔑的なニュアンスを込めた(る)ことを知っているだろう。また現在のロシアには、5万人未満の集団に対して用いる「先住少数民族」という法律用語もある。ユ・ヒョジョン氏は

ロシア・ソ連において「少数民族」を指す用語と概念が、国の民族政策を反映して変遷を繰り返してきたと述べている〔ユ2007〕。当事者たちが「少数民族」や「小民族」を使う場合も含め、その用法には十分な注意を払う必要があるだろう。

文献リスト

〈日本語文献〉

アンダーソン、ベネディクト 2007. 白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』書籍工房早山。

伊賀上菜穂 2018. 「シベリアのロシア人——ロシア人地域集団とその文化的特色——」永山ゆかり・吉田睦編著『アジアとしてのシベリア——ロシアの中のシベリア先住民世界——』勉誠出版。

阪本秀昭 2019. 「櫻間瑛著『現代ロシアにおける民族の再生』『ロシア史研究』(103) 7月 131-135.

濱本真実 2011. 『共生のイスラーム——ロシアの正教徒とムスリム——』山川出版社。

ユ・ヒョジョン 2007. 「ロシア・ソ連における『少数民族』——概念変遷の政治社会史——」岩間暁子・ユ・ヒョジョン編著『マイノリティとは何か——概念と政策の比較社会学——』ミネルヴァ書房。

〈英語文献〉

Sunderland, Willard 1996. "Russians into Iakuts?: "Going Native" and Problems of Russian National Identity in the Siberian North, 1870s-1914." *Slavic Review* 55 (4), 806-825.

(中央大学総合政策学部教授)